

●テーマセッション(80 分):

構築主義が取り戻す経営学 ―主意主義的経営学の隘路を越えて―

◎松嶋登 (神戸大学大学院 経営学研究科 教授)

中原翔 (大阪産業大学 経営学部 准教授)

「構築主義論争の転軸機としての言語論的転回:組織不正の制度的分析へ向けて」

吉野直人 (松山大学 経営学部 准教授)

「組織ルーティン研究におけるナラティブ・アプローチへの展開:ostensive から patterning へ」

浦野充洋 (関西学院大学 商学部 准教授)

「制度の象徴性と物質性:空間マネジメント研究の展望」

貴島耕平 (関西学院大学 商学部 助教)

「組織開発のリサーチプログラム:行為する経営学の学説史」

ワークショップ形式

〔 概 要 〕

経営学において社会構成主義を統一テーマとして掲げる全国大会は珍しいが、社会構成主義自体はそれほど目新しくはないだろう。非決定論とセンスメイキング、組織エスノグラフィー、意思決定前提を問い直すメタ学習など、類似研究は過去にも存在したのではないか。そう感じる人も多いのではなかろうか。そして、経営実践への含意に欠ける主意主義的な議論は、もう聞き飽きた。そういう声も聞こえそうである。

本ワークショップは、そういう人にこそ、聞いてほしい。社会構成主義は、二通りの受容のされかたがある。ひとつは、より普及している理解であるが、社会的相互作用（コミュニケーション）を通じたリアリティの構成に注目する（construction of social reality）主意主義的な Constructivism であり、通常、我が国では「構成主義」と呼ばれてきた。もう一つは、超越的な存在物である社会が我々の日常生活を構成する(socially construction of reality)ことを前提とする Constructionism であり、こちらは「構築主義」と呼ばれる（e.g., Searle, 1995, 2001; Hacking, 1999, 2000; 上野, 2001）。

この 2 つの立場は、似て非なる含意を持っている。本ワークショップで焦点を当てるのは、あまり普及してない后者の「構築主義」のほうである。この構築主義こそ、学問としての経営学を取り戻す基盤になると考えているからである。本ワークショップの狙いは、このことを経営学における様々な研究領域で展開される構築主義を一覧することで確認することにある。

話題提供の第一報告の中原は、構築主義論争の深因を構成主義と構築主義の哲学的立場にあることを紐解き、この論争の嚆矢となった「社会問題の構築主義」を踏まえた組織不正の制度的分析を行う（e.g., Palmer, 2012）。具体的には、制度を通じて合理的に導かれる組織不正が、単に違法 (illegal) -合法 (legal) という基準のみならず、正統(legitimate)-異端 (illegitimate) の基準を通じて分析される。第二報告の吉野は、これまで何度となく繰り返されてきた組織ルーティンと学習阻害のアイロニーを克服するために、ルーティンの遂行性概念を踏まえて、ナラティブに注目するに至った最新動向の含意を解き明かす。第三報告の浦野は、同じく制度の遂行性を議論してきた制度派組織論において、制度の象徴的次元に加

え、物質的次元が注目されていることの意味を、近年の空間マネジメントへの関心の高まりとともに考察する。第四報告の貴島は、組織開発の嚆矢となった社会技術システム論や職務特性理論の構築主義的リサーチプログラムを検討することを通じて、組織で働く人々に積極的に介入する「行為する経営学」として発展してきた学説史を紐解く。

[参加者へのメッセージ]

10月20日(日) 11:00～12:20 開催(A会場:1-301)

本ワークショップでは、社会構成主義を前面に押し出した研究を取り上げておりません。そうした研究は、他のテーマセッションでお聞きください。しかし、本ワークショップで取り上げる概念は、どれも経営学では主流に位置づけられながら、社会構成主義（のうち構築主義）の影響を強く受けているか、あるいはその含意を取り込むことで経営学としての学問性を取り戻そうとしているものばかりです。このことから、本ワークショップのタイトルを「構築主義が取り戻す経営学」としました。

また、すでに小樽大会で配布済みですが、本報告に関連したレビュー論文を、以下からダウンロードすることができます。本ワークショップにご関心がおありの方は、ダウンロードしてください。

https://www.b.kobe-u.ac.jp/papers/2018_13/